

実践死亡時画像診断 (Ai)

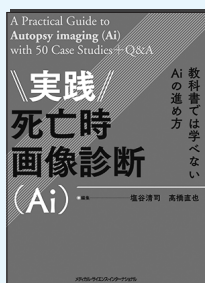
教科書では学べない Ai の進め方

編集：

塩谷清司 (聖隷富士病院放射線科 部長 / 医療安全管理室 室長)

高橋直也 (新潟大学大学院保健学研究科 教授 / 新潟大学医歯学総合研究科死因究明教育センター 副センター長)

発行：メディカル・サイエンス・インターナショナル (MEDSi)



2024 年 8 月刊行

B5 変型判・200 ページ

定価：5,830 円 (10%税込)

◆『実践死亡時画像診断 (Ai)』を拝読して

本書の書評を執筆するに当たって、少し自己紹介をさせていただきます。私は、島根医科大学 (現 島根大学医学部医学科) を卒業後、出身地の岐阜に戻り、岐阜大学医学部放射線科に入局しました。岐阜大学で放射線医学に関する研鑽を積み、2019年4月1日より浜松医科大学放射線診断学講座の教授を拝命し、静岡県浜松市に拠点を移しました。

2019年夏に静岡県内で行われた画像診断に関する研究会を主催した際に、本書の編集にも携わっていらっしゃる塩谷清司先生 (聖隷富士病院放射線科部長) から「五島先生、実は私は先生の先輩なんですよ」とお声をかけていただきました。「静岡県では死亡時画像診断を行っていく拠点がなく、360万人という人口規模からも、何とか大学がリーダーシップをとってやってもらえませんか？」という突然のお話に、

教授になりたての私としては何ともの的を射ないような返答をしつつも、社会貢献へのひとつの事案として強く印象に残っていました。

その後、2023年度には浜松医科大学が死因究明拠点整備モデル事業に採択され、学内での遺体専用CT装置の設置および画像PACSの整備を行い、2024年1月より浜松医科大学に死因究明画像診断センターが設立されました。それまでは、院内症例についての死亡時画像診断を放射線科医が行っていましたが、死因究明画像診断センターの稼働により静岡県警および法医学講座との密な連携のもと、県内から広く症例を引き受けることができるよう、現在も運用の整備を行っているところです。

実際の死亡時画像診断においては、救急医や内科医などが画像を目にする機会も多く、多くの医師にとっては、生きている患者の画像診断以上に判定に迷うものです。当院においても、典型的な死後変化である気道内液貯留に対して「誤嚥疑い」と臨床医がコメントしたことで右往左往した経験もあります。

本書においては、第1章として「死亡時画像診断に必要な基礎知識や蘇生後特有の変化」について解説された後に、「内因死」(第2章)と「外因死」(第3章)に分けて幅広いケースについて紹介されています。さらに、最終の第4章では「死亡時画像診断に関するFAQ」について、一般的な疑問点から運用や現状および教育に関することまでが丁寧に解説されています。ランニングタイトルにもあるように、教科書では学べない事項についてコンパクトにまとめられており、本書は死亡時画像診断のバイブルとして、是非とも職場において置きたい1冊であると思います。

浜松医科大学放射線診断学講座 教授 /
死因究明画像診断センター センター長 /
医療 DX 推進担当病院長特別補佐
五島 聡